

皮膚科のトリビア

241

浅井 俊弥(浅井皮膚科クリニック)

<http://www.asai-hihuka.com/trivia.html>

トリビア(trivia)=3を意味するtriと+道を意味するviaでもとは三叉路の意。古代ローマで三叉路が多かったことから「どこにでもある場所」,そこから転じて「瑣末なこと」となり,今では雑学的知識,豆知識,などを意味する言葉として定着している。

本欄は,小誌・浅井編集委員が学会・研究会などで見聞きした「皮膚科のトリビア」をその都度まとめ,連載しています。ご意見等ございましたら,ぜひ小誌「声」欄までお寄せください。

●第40回日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会から

令和6年4月20日

繰り返す生じる下肢の溢血斑から診断に至ったCushing症候群

30歳代の女性。5年前から両下腿に溢血斑の出現を繰り返している。鶏卵大までの斑状紫斑で,触診では局所冷感を伴い,紫斑上に乾いた潰瘍や瘢痕が散在していた。また,両下腿の浮腫と皮膚の菲薄化を伴っていた。皮膚生検では毛細血管拡張,出血,脂肪織の変性で,血管炎はなし。高血圧,下肢浮腫の精査を行ったところ,左副腎腫瘍によるCushing症候群の診断に至った。繰り返す溢血斑の原因疾患として念頭に置く必要がある。

一言コメント

「顔面には眉毛外側の脱毛がある程度で特徴的な症状はなかったとのこと。下肢の浮腫の鑑別疾患にも加えておく必要がありそうだ。ちなみに食事依存性Cushing症候群では,食後高血糖を抑制する,グルコース依存性インスリン分泌促進ポリペプチド(glucose-dependent insulintropic polypeptide: GIP)との関連が指摘されているようだ。」

●第40回日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会から

令和6年4月20日

高度肥満の治療で改善した両下腿の硬化性脂肪織炎

BMIが50%の50歳代男性とBMIが40%の60歳代女性。両下腿の浮腫と硬化があるが,下肢静脈瘤,

原因となる薬剤の内服歴はなし。専門医療機関による高度肥満に対する各種治療を行い,BMIはそれぞれ35%,38%まで軽快。それとともに硬化は改善した。

一言コメント

「こういうケースは肥満に伴う下肢静脈瘤が原因だと思っていて,肥満だけでも症状が出現するとは思わなかった。一方で,高度肥満によるリンパ浮腫から硬化に至る例も経験する。表面に毛細リンパ管拡張症があれば鑑別がつくが,両者の見分け方や併発があるかないかの判断は簡単ではないと思う。いずれにしても肥満に対する積極的な治療を勧める必要があると感じた。」

●第40回日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会から

令和6年4月20日

ステロイド内服による医原性Kaposi肉腫

80歳代女性,薬剤性間質性腎炎のため,プレドニゾン20 mg/日が開始された。半年後から四肢に紫斑と暗赤色の結節が多発してきた。腎機能低下は進行し,血液透析が導入されたところから紫斑と結節が急速に増数・増大した。皮膚生検では核分裂像を伴う血管内皮細胞の増殖があり,HHV-8が陽性で,Kaposi肉腫と診断した。全身CTでは臓器病変はなし。HIV感染はなく,ステロイドによる医原性Kaposi肉腫(免疫抑制型Kaposi肉腫)と診断した。ステロイドは減量したが腎不全により永眠したため,病変の経過は不明である。

一言コメント

「医原性Kaposi肉腫は多くの場合、免疫抑制薬の減量や中止で軽快するが、一度改善した例でも、全身状態の悪化とともにKaposi肉腫が再燃・悪化する例もあるらしい。AIDS関連では、抗レトロウイルス薬で改善する。積極的な手術、電子線照射を行わなければならない例は少ないらしい。」

●第40回日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会から

令和6年4月20日

tripe palm

70歳代の男性。1カ月前から顔面にびまん性の色素沈着をきたし、アジソン病疑いで内科受診、皮膚病変について皮膚科受診となった。体幹、両腋窩に脂漏性角化症が多発、口唇にも小丘疹を認め、指腹では皮丘が隆起し皮溝が目立つ状態であった。悪性黒色表皮腫、Leser-Trélat徴候、florid cutaneous and mucosal papillomatosis, tripe palmと診断した。精査の結果、肝転移を伴う胃癌がみつき、化学療法を行ったところ、皮膚病変は改善した。

一言コメント

「tripe palmという症候名は、初めて聞いた。手掌の皮膚肥厚と角質増生で動物の胃袋(tripe)のように表面が隆起し、網状を呈する状態をいう。悪性腫瘍に伴って発生する上皮増殖性デルマトロームの1つで、胃癌、肺癌に伴うことが多いとのこと。」

●第40回日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会から

令和6年4月20日

足底板の使用で改善した尋常性疣贅

難治性の足底疣贅に対し、足底板による除圧を併用したことで早期に症状が改善した症例の報告。左足蹠に15×10 mm大、高さ3 mmの疣贅を有する80歳代の女性。3年間4カ月にわたり定期的に液体窒素凍結、サリチル酸外用、グルタルアルデヒド外用を行ったが改善に乏しかった。通常の治療に加え、足底板を用いた除圧を試みたところ、3カ月で改善した。

一言コメント

「足底に生じた場合は歩行、立位で体重がかかり疣贅が埋まってしまうため、なかなか治療に反応してくれない症例がある。積極的に免荷を指導する必要があると以前から感じていたが、どのように対応すればいいのかがわからなかったので、勉強になった。」

●某製薬会社主催Web講演会から

令和6年4月23日

体臭あれこれ

腐ったチーズのような足のにおいは、足趾の皮脂が多く混じった汗が常在菌によって分解されて生じるイソ吉草酸が原因。腋窩のツンとしたにおいは皮脂中の脂肪酸がコリネバクテリウムによって分解されて生じるビニルケトン類が原因。後頭部などの古い油のようないわゆるオヤジ臭は、汗中の乳酸が黄色ブドウ球菌などによって修飾されたジアセチルが原因。同様に汗中の乳酸が酢酸に変われば酸っぱいにおいになる。年齢とともに増加する加齢臭は皮脂中の脂肪酸(パルミトレイン酸)が酸化して発生するノネナールが原因。

一言コメント

「初めて聞いた。面白かった。ちなみにワキ汗による衣類の黄ばみはリポフスチンが原因。ABCC11変異による腋臭症は、湿潤性の耳垢と乳癌のリスクを伴うとのこと。」